

# 「出前授業」で 子どもたちが学んだこと 企業が学ぶこと



カシオ計算機株式会社  
CSR推進部 CSR推進室  
室長 木村則昭さん



「カシオ」と聞けば、誰もが電卓や腕時計、電子辞書を思い浮かべるほど、私たちの生活に欠かせない企業です。

平成17年度からは、「小さな親切」作文コンクールの協賛企業として、全入賞・入選者に副賞を、提供いただいています。

この度、小学生を対象に年2回開催されている「学びのフェス」(主催：毎日新聞社、毎日小学生新聞、毎日メディアカフェ)に参加している同社の様子を見学に行きました。

## 初めてのねじ回しに 子どもたちは大歓喜

3月29日。35社の企業が、その技術や知識をベースに授業を行う「学びのフェス」が、東京にある科学技術館で開催されました。カシオ計算機株式会社(以下、「カシオ」)が行ったのは、電卓を分解して組み立てるという「出前授業」。講師を務めた同社CSR推進室の木村則昭室長によ

ると、「毎回、大人気の授業」なのだそうです。

子どもたちは授業が始まる前からそわそわ。事前に用意された教材を調べたり、同伴のお母さんに「これなに?」と聞いたりしています。

「今は、ねじ回しを持ったこともない子も多くて、何かを分解するとう経験もないんですね」と木村室長。それでも子どもたちの飲み込みは早く、楽しそうにねじを外しています。

あなたの  
誕生日  
当てちゃうよ!

**TRY!**  
授業で行われていた  
「電卓マジック」をご紹介します!

- ① ACを押してクリア
- ② あなたの誕生日の月の数に 4 をかける
- ③ 9 を足す
- ④ 25 をかける
- ⑤ 生まれた「日」の数を足す
- ⑥ そこから 225 を引く



さあどうでしたか?



世界初の小型純電気式計算機「14-A」

**カ**シオ計算機株式会社の創業者、榎尾俊雄氏の旧宅は、東京・世田谷区の閑静な住宅街にあり、「発明記念館」として公開されています。ここには世界初の小型純電気式計算機「14-A」を始め、俊雄氏が考案し同社が製造した、歴代の製品が展示されています。係の方が電卓や時計、電子楽器などの開発の歴史を詳しく説明してくださり、その商品開発に注がれた熱意に驚かされました。

ご存知の方も多いと思いますが、カシオ計算機は、榎尾四兄弟がそれぞれの役割を担って発展させました。次男の俊雄氏は、「自分はアイデアを出すだけ。それ以外の生産や営業、財務などは全部兄弟たちがやってくれた」と、生前のインタビューで兄弟への感謝を語っています。また、「企業は儲けることだけを考えてはダメ。人の役に立つものを作り、社会貢献をすることが何より大事」との信念を持っており、その信念は現在も同社へ受け継がれています。そして何より、俊雄氏が吟味した自宅のステンドグラスなどの装飾や調度品、そして自然豊かな庭園がとても素敵で、こちらも見応えのある価値があります。

皆様も一度、訪れてみてはいかがでしょうか。

**榎尾俊雄発明記念館**  
住所 ■ 東京都世田谷区成城4-19-10  
見学申込 ■ Webサイトからの完全予約制  
入館料 ■ 無料



## カシオのルーツを探る！ 榎尾俊雄発明記念館へ行ってきました

内部にはボタン電池や基盤もありますが、講師の指導のおかげで部品を無くす子もいません。この電卓は太陽電池内蔵なので、ボタン電池を外しても動きます。でも、太陽電池を手で覆うと画面は消えてしまいます。そんな実験もしつつ、省エネルギーの意義なども教えていました。同社ではこの他、三か所の拠点でも受け入れ授業を行っています。今、カシオではCSRに力を入れています。あまりなじみのない言葉

ですが、企業が自身の事業を通じて、社会に対して責任を果たし、共に発展していくという考えです。「単なる社会貢献と解釈するのは間違いで、もっと広い見地からとらえる必要があります。持続的に社会に貢献するためには、企業が持続しなくてはなりませんし、社員一人ひとりがCSRの意味を理解しなければ続かないと思います」。このため、カシオでは各セクションにCSRリーダーを置いて研修等

を行い、彼らから全社員へCSRの考え方を浸透させる仕組みも作りました。「例えば、ここで授業をしたからと言って、電卓が売れるわけではありません。でも、いろいろな場所で社会と関わることによって、その場でのニーズも見えてきますし、自分の技術や知識がどのように社会に貢献できるかを考えるきっかけにもなりますよね。やはり、実際に経験しないとダメですね。私たちもここ

で学んでいるわけです」と、木村室長は話してくれました。その話を聞いて、「小さな親切」運動との共通点を感じます。例えば、日本列島クリーン大作戦。実際に参加すると、地域の人やゴミの現状などが見えてきて、意識が随分変わります。受講した子に感想を聞くと、「すごく楽しい。教わったことを友達に教えたいです」と言っていました。近い将来、その子が講師になって

毎年、作文コンクールの副賞を提供して頂いています